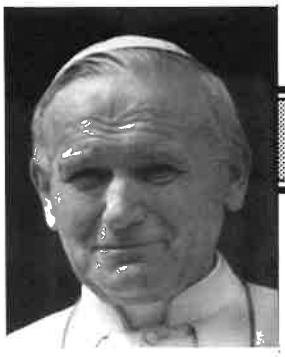
平成10年（1998年）2月10日発行　第214号　（昭和59年10月1日第三種郵便物認可）



教皇様の聲 2 214号

Libreria Editrice Vaticana, Città del Vaticanoの転載許可済 ©1998

「あなたの内にある真理の声に耳をかたむけなさい」〈灰の水曜日〉

「心を引き裂け」(ヨエル２・13)と預言者は叫びます。「服ではなく心を引き裂け。」(同)これは旧約聖書でよく見かける象徴的な行動です。衣服を引き裂く行為は、内側にある心の悲しみを表わしていました。本日の典礼で教会は、預言者ヨエルの勧めを思い出させています。

なぜ「心を引き裂かねばならない」のでしょう？それは、罪に凝り固まらないため、罪が習慣と化して人を支配し、その人の内的生命を手中にして罪の「法」を押しつけることを防ぐために、必要だからです。

第二バチカン公会議は言っています。「人間は心の中に神から刻まれた法を持っており、それに従うことが人間の尊厳であり、また人間はそれによって裁かれる。良心は人間の最奥であり聖所であって、そこでは人間はただ一人神と共にあり、神の声が人間の深奥で響く。」(現代世界憲章16番)

心を引き裂くとは、人間がただ一人親密に神と共にあるこの聖所に入ることです。キリストは灰の水曜日の典礼で読まれる山上の説教の言葉で私たちに問いかけておられます。この内なる聖所は人間性の中心となる部分です。人間はその思いと言葉と行ないの内的真理のゆえに完全に自分らしく、つまり人間となります。

ですから私たちは、真理の妨げとなるあらゆるものから距離を置く必要があります。神に立ち返るためには、心の奥で響く真理の声を聞かねばなりません。真理の声は神の声です。

「民を集め、集会を命じよ」と預言者は促します。(ヨエル２・16)四旬節は、教会共同体の刷新のための好機です。良心という内なる聖所を見い出すため自分自身に向かおうという着想は、聖なる集会へと人を駆り立てます。額に灰を受けた私たちもみな互いに手を取り合って、今日その集会に加わります。

典礼も福音にあるキリストの言葉を通して一人ひとりに語りかけます。それは同時に、皆に向かって話しているのです。「立ち戻れ。」(ヨエル２・13)「神と和睦してとどまれ。」(IIコリント５・20)「授かった神の恩寵を無駄にせぬよう勧める。」(同６・１)

「恩寵」とは「賜物」を意味します。恩寵を授けるのは神です。四旬節の賜物を表わすために、教会は使徒の言葉を借りて言います。「神は罪を知らなかった御方を私たちのため罪となされた。それは私たちをその方において神の正義とするためである。」(IIコリント５・21)　私たちに向けられたこの言葉は、一体何を意味するのでしょう？

賜物は遠くからやって来るということです。神が私たちの良心の聖所に住まわれる、と告げようとしています。内的真実を見つけたいなら、神に目を向けなければなりません。罪を知らなかった御方が人間に人間の真実を示し、私たちの罪を担われました。世の罪のためお受けになったゴルゴタの十字架と死を通して、罪と死よりも偉大な愛を示してくださったのです。

本日、教会共同体は再び、キリストの過越の秘義に向かう旅を始めます。贖いの秘義に対してもっと敏感な心を持つように努めなければなりません。

「清い心をつくり、新しい確かな霊を与えたまえ。」(詩篇51[50]・12)　アーメン！　(92年３月４日)

キリストは苦しみを共にするために来られた

キリストは人となって人類を贖われた

●(…)「みことばは人となった。」(ヨハネ１・14)他のどの場所よりもロレトの聖堂では、福音史家ヨハネの言葉の深い意味を感じ取ることができます。聖家族の家に入ると、「共におられる神」イエズス・キリストが御父の愛を力強く私たちに語りかけてこられます。その愛は、贖いのための託身という最も崇高な形で示されました。神ご自身が人間を捜し、人となられ、神の超越性と人間の条件との間に橋を架け

てくださいました。「キリストは本性として神であったが、神と等しいことを固持しようとはせず、…死ぬまで、十字架上に死ぬまで、自分を卑しくして従われた。」(フィリッピ2・6～8)キリストは私たちの苦難を取り去りに来たのではなく、苦難を共にし、担い、それらを救いの価値あるものとするために来られたのです。そのため人間と同じ条件・同じ限界と悲しみを分かち合い、贖われました。キリストが成し遂げた救いは、すでに病人の癒しという形で示され、困難の中で苦しむ全ての人に希望の地平線を開きました。

●「聖霊の力によって。」託身の秘義は聖霊のみわざです。聖霊は、三位一体の中で「愛の位格、創造によらない賜物ですから、創造の秩序において、神が授与する全ての賜物の永遠の源泉であり、恵みの秩序において、三位一体の神自身の交わりの直接的原理、ある意味でその主体です。」(回勅『聖霊・生命の与え主』50番) 1998年は、紀元二千年を迎える準備の第二年目に当たり、聖霊に捧げられています。

私たちの心に降り注がれた聖霊は、キリストが啓示された「傍らにおられる神」に気づかせてくれます。「あなたたちが神の子である証拠は＜アッバ、父よ＞と叫ぶみ子の霊を神が私たちの心に遣わされたことである。」(ガラツィア4・6)聖霊は全ての人、とりわけ「霊の初穂を持つ」人と「自分の体があがなわれることを期待している」人(ローマ8・23参照)のまことの希望の守り手です。聖霊降臨の大祝日へと続く典礼暦が示すように、聖霊は人間の心の中で、真に「貧しい者の父、賜物の送り主」「心を照らす光」となります。疲れた人に休息をもたらし、日中の暑さには屋根となり、あらゆる時代の心労や戦い、危険の中で慰めとなる「魂の甘美な客人」です。困難な状況に直面して打ち勝つ力を人の心に与えるのは聖霊です。

マリアは苦しむ人への憐れみのしるし

●「おとめマリアの胎内で。」聖なる家の壁を見つめていると、主の御母が神の救いの計画に同意し、協力しますと答えた声のこだまが今も響いているようです。なんと寛大な放棄、信頼にあふれた服従でしょう。純粋に神のための者となることによって、マリアの生涯は御子イエズスの救いのわざへの絶え間ない協力に変わりました。

大聖年を迎える準備の二年目に当たり、マリアは「聖霊の声に従った女性、寡黙で思いやりのある女性、アブラハムのように神の意志を〈希望するすべもなかった時に、なおも望みを抱いた〉(ローマ4・18参照)希望の女性として」(使徒的書簡『紀元二千年の到来』48番)観想され、模範と仰がれねばなりません。自ら主のはしためと宣言したマリアは、自分が人間を愛する主に仕えるため存在することをも心得ていました。マリアの模範は、神の主権を無条件に受け入れることで、人は完全に開かれた心を持つようになると教えています。こうしてマリアは苦しむ人へのこまやかな注意と同情の手本となりました。天使のお告げに耳を傾けた後、急いでエリザベトを助けに行ったことは意味深長です。後にカナの婚宴で困ったことが起こった時、マリアは救いの手を差し伸べ、先見ある神の愛を大いに示しました。処女マリアの奉仕が最大限に発揮されたのは御子の受難と死に立ち会った時でした。マリアは十字架のもとで、教会の母としての使命を受けました。

「病人の回復」であるマリアを見て、何世紀にも渡り多くのキリスト信者が、母のような優しさで病人を見守ることを学んできました。

●ロレトの家で託身の秘義を黙想すると、神の救いのわざへの信仰が生き生きしたものになります。神はキリストにおいて人間を罪と死から解放し、新しい天と地(IIペトロ3・13参照)への希望に心を開かせました。苦しみや矛盾、利己主義と暴力に引き裂かれたこの世にあって、信者は「全被造物が今まで嘆きつつ陣痛の苦しみにあっていることを」(ローマ8・22)知りつつ生きています。そして言葉と行ないで、復活したキリストを証しする務めを引き受けるのです。

そこで私は使徒的書簡『紀元二千年の到来』の中で、信者たちが「しばしば私たちの目から隠されてはいるものの、今世紀の終わりに現われている希望のしるしを」評価するよう、「人間生活にとって有益な科学的、技術的、医学的な進歩」(46番)に特に注目するよう勧めました。とは言え、病の克服や苦痛の軽減という分野での成功が、医療を寛大な奉仕ではなく利益という観点からとらえたり、家庭が取り残されて健康上の問題に直面させられたり、社会の最も弱い立場にある人々が不正な黙殺と差別を強いられるなど人間人格の中心性と尊厳を無視し、踏みにじる多くの状況を忘れさせることにつながってはなりません。世界病者の日というこの機会に、教会共同体が全ての信者と善意の人々の協力のもと、人間社会を「希望の家」に変える心構えを新たにするよう強く勧めたいと思います。(…)

●苦しむ人の慰めであるマリアに、心身の苦しみを負う人たちと医療関係者、病人の看護のため寛大に尽くす全ての人々を委ねます。

ロレトの処女よ、信頼を込めてあなたを見上げます。

「私たちの生命、甘美、希望」よ。御子イエズスの誕生を待つあなたと同じ心のときめきをもって、紀元二千年を待ち望む恵みが与えられますように。

悲観主義から逃れることができるよう、お守りください。この時代の闇の中にも、主がおられる輝かしいしるしを見い出すことができますように。

優しい御母よ、病人たちの涙とため息と希望を委ねます。慰めと希望が彼らの上に注がれますように。

【近刊のご案内】
世の光 イエズス・キリスト「カトリック教会のカテキズム」要約 Q&A改訂版……イバニェス・ラングロイス著　新田壮一郎訳　本体価格一、五〇〇円　〒三一五円
★品切れのため御迷惑をおかけしておりましたが、このたび改訂版が近日刊行のはこびとなりました。ぜひご一読ください。

（昭和59年10月1日第三種郵便物認可）

イエズスの御苦しみと結び付いた彼らの苦しみが、贖いの道具に変わりますように。

聖母の模範に従って、生涯を絶えざる神の愛への賛美とすることができますように。他人の難儀に目を留め、困っている人に援助を送り、孤独な人の傍らにあることができますように。どんな悲劇の中でも、希望を作りだすことができますように。

旅を続ける私たちに、悲しみの時も喜びの時にも、母の愛で御子イエズスをお示し下さい。アーメン。

（第6回世界病者の日に寄せて。）

平和のために働こう！ 〈年頭のあいさつ〉

元旦に当たり、心からご挨拶致します。皆さんに平和がありますように！本日の典礼は神の御母マリアを祝います。祝された処女の神的母性の内に根本的な新しさ、あらゆる希望の成就、真の刷新と人類の発展を目指す全ての計画が保障されることを表明しながら。

1968年、教皇パウロ6世はこの日を平和祈願のために捧げることを願い、各国の首脳や国会議員たちへのメッセージを添えました。この先例にならい、私も世界平和の日のメッセージを発表します。私にとって20周年目に当たる今年のテーマは「全ての人の平和は一人ひとりの正義から」です。1998年は世界人権宣言の発布50年に当たるのでこの言葉を選びました。人権宣言は記念すべき宣言から始まります。「人類家族全員の固有の尊厳と、平等で奪うことのできない権利を認めることは、自由と正義と世界平和の基本である。」（前文）

紀元二千年は、平和を築くためのめざましい進歩を遂げることができるでしょうか？それは全ての人の望みではありますが、全ての人が正義と人権尊重と、それに伴う義務を絶えず実行することが不可欠です。

地球規模化の波が世界を覆っています。これを公正と連帯の方向に向けねばなりません。意図的であろうとなかろうと、個人、グループ、民族を疎外してはなりません。1995年十月の国連演説で述べたように、「国々が家族となるよう」努めなければなりません。最も貧しい国々の対外債務を減らすための協力は確かにこの方向への前進ですが、恒久的な解決には全ての人の一致協力した努力を要します。さらに全ての国で合法性と適正な統治を進め、腐敗を退ける必要があります。目前に迫った大聖年は、信者にとって、分かち合いの精神と簡素な生活への強い呼びかけです。それは創造の実りをもっと公平に分配するための条件です。

兄弟姉妹の皆さん、紀元二千年を前に、私たち人類家族には誠実に見守ってくださる御母がいます。人間と同じ条件を分かち、正義の道を示してくださった神の御母。新しい年の初めに、マリアは全ての人にイエズスを示し、繰り返します。「これが平和の道です。何でも彼の言う通りにしなさい。一人ひとりが正義のために働くなら全ての人に平和が訪れるでしょう。」

神の御母マリア、正義の鏡、平和の元后、私たちのためにお祈りください！　（1998年1月1日）

「聖霊を信じます。」

「聖霊」シリーズ（1）

紀元二千年の大聖年を迎える準備の二年目に当たる今年1998年は、聖霊に捧げられた年です。そこで、教皇さまのカテケージスの中から聖霊に関するお話のシリーズの一部を訳し、新連載として加えることにしました。

1 「聖霊を信じます。」（…）

ニケア・コンスタンチノープル信経は、使徒信経のこの一文をさらに引き伸ばした形になっています。「われは信ず、主なる聖霊、生命の与え主を。聖霊は父と子より出、父と子とともにおがみあがめられ、また預言者によりて語り給えり。」

信経は教会の手で公式化された信仰告白です。それを読むと、三位一体の神の啓示と同じ文脈で聖霊に関する真理を述べた、聖書の記述に行き着きます。教会の聖霊論は聖書、特に新約聖書に基づいていますが、旧約聖書にもある程度の予告が見られます。

まず最初の出典は、受難と死を前に弟子たちに話された、ヨハネ福音書にあるキリストの別れの説教です。イエズスは自分が「去る」ことに関連して、霊が使徒たちの上に降ることを告げ、聖霊の降臨について話されました。「私はあなたたちに真実を言う。私が去るのはあなたたちにとって良いことである。私が去らぬなら、あなたたちには弁護者が来ないからである。しかし去ればそれを送る。」（ヨハネ16・7）

この言葉は逆説のように思えるかもしれません。イエズスは強調するために「真実を言う…」と言われ、ご自分が「去る」こと（すなわち受難と死）を「あなたたちにとって良いことである」と仰せになりましたが、すぐに説明を加えて、自分が死ねばどんな良いことがあるのかを話されました。それは贖いのための死であり、聖霊の到来によって完成するはずの神の救いの計画のた

めに必要であったからです。従って全ては使徒たちのため、人々が聖霊を受けて新しい生命を得るであろう未来の教会のためだったのです。聖霊の到来とそれによって起こる全てのことはキリストの贖いの成果です。

2 イエズスの旅立ちが十字架上の死を通じてのものであるなら、いかに福音史家ヨハネがこの死の中に十字架に架けられた御方の力と栄光を見通していたかがわかるでしょう。しかし、イエズスの言葉は最終的に父のもとに行かれることをも示しています。(ヨハネ16・10参照)使徒行録によると、イエズスは「いま神の右手によって上げられ、御父から約束の聖霊を受けられました。」(2・33)

聖霊の降臨があったのはご昇天ののちでした。キリストの受難と贖いの死が、完全な実を結びました。人の子イエズス・キリストは、救い主としての使命の締めくくりに御父から聖霊を受けられました。満ちあふれる聖霊は使徒たちに、そして世々の教会に降り注がれます。イエズスは「私は地上から上げられて、全ての人を私のもとに引き寄せる」(ヨハネ12・32)と予告していました。広い意味では全ての人の救いのための、狭い意味では贖われた人々に与えられる恵みを完全なものとするための贖いのわざが普遍のものであることを、はっきりと示しています。しかし、この普遍的贖いを完成させるには聖霊が必要でした。

3 聖霊はキリストが「去られた」結果として、またそのおかげで「来られる」方です。ヨハネ福音書16・7は、この因果関係を示しています。聖霊はキリストによる贖いの力で送られました。「私が行けば、それを送る。」(回勅『聖霊・生命の与え主』8番参照)まことに、「神のご計画では、キリストが去るのは聖霊の派遣と到来の必要条件ですが、その言葉はまた、救いをもたらす神の新たな自己贈与が今、聖霊において始まったことをも明らかにしています。」(同11番)

イエズス・キリストが十字架に架けられたことによって「全ての人を引き寄せる」(ヨハネ12・32)のが真実なら、私たちは最後の晩餐の時の話をもとに、それが聖霊の派遣を通じて成し遂げられる栄光のキリストのみわざであることを理解します。キリストが去らなければならないのもそのためです。託身が贖いの力を持つのは、聖霊によってです。この世を去ったキリストは、救いのメッセージを残したのみならず、「聖霊をお与え」になりました。メッセージの有効性も、贖いそのものの完全な効果も、聖霊にかかっていたのです。

異なるペルソナ

4 高間での最後のお話の中でイエズスが示した聖霊は、イエズスご自身とは明らかに別のペルソナです。「私は父に願おう。そうすれば、父はほかの弁護者をあなたたちに与えてくださる。」(ヨハネ14・16)「弁護者すなわち父が私の名によって送りたもう聖霊は、すべてを教え、あなたたちの心に私の話したことをみな思い出させてくださるだろう。」(同14・26)聖霊について話す時、イエズスはしばしば「その方」という言葉を用いています。「それが私について証明されるだろう。」(ヨハネ15・26)「その方の来るとき、この世の過ちを指し示すだろう。」(16・8)「その方つまり真理の霊の来るとき、霊はあなたたちをあらゆる真理に導かれるであろう。」(16・13)「霊は私に光栄を与えられる。」(16・14)これらの言葉からよくわかるのは、聖霊がペルソナを備えた御方であり、キリストから発する非人格的な単なる力ではないということです。(ルカ6・19「イエズスから力が出て…」など参照)ペルソナである聖霊は、ご自身の活動性を備えています。実際、イエズスは使徒たちに聖霊についてお話しになった時、「(聖霊は)全てを教え、あなたたちの心に私の教えたことをみな思い出させてくださるだろう」(ヨハネ14・26)、「それが私について証明されるだろう」(同15・26)、「霊はあなたたちをあらゆる真理に導かれるだろう」「聞いたことを語られるであろう」(同16・13)、「霊は私に光栄を与えられる」(16・14)、「この世の過ちを指し示すであろう」(16・8)と言われました。使徒パウロは、霊は「み旨のままにおのおのに分け与えられる」(Iコリント12・11)、「霊は聖徒のために取り次がれる」(ローマ8・27)と言っています。

5 このように、イエズスが啓示された聖霊は位格(ペルソナ)を持った存在(三位一体の第三のペルソナ)であり、ご自身の活動性を備えています。しかし、同じ「別れの説教」の中でイエズスは、聖霊と御父と御子を結ぶ絆を示しておられます。イエズスは聖霊が来られることを告げると同時に神が三位一体であることを疑う余地なく啓示されました。

イエズスは使徒たちに、「私は父に願おう。そうすれば、父はほかの弁護者をあなたたちに与えてくださる」(ヨハネ14・16)、「父から出る真理の霊」(同15・26)、「父が私の名によって送りたもう聖霊」(14・26)などと仰せになりました。このように聖霊は御父や御子とは異なる御方ですが、同時に緊密に一致しておられます。聖霊は御父から「発し」、御父は御子の名によって聖霊を「お送りになる」。それは、御子が十字架上で自らいけにえとなって成し遂げた贖いの成果です。そこでイエズス・キリストは「私が去ればそれを送る」(ヨハネ16・7)と言われたのです。「父から出る真理の霊」を、キリストは弁護者と呼ばれました。「私が父からあなたたちに送る弁護者」(同15・26)がそれです。

6 高間でイエズスが話された言葉を伝えるヨハネの記述は、三位一体の神による救いのわざを告げています。回勅『聖霊・生命の与え主』に書いたように、「聖霊は、神性において御父と御子と同じ本質を

世の光 イエズス・キリスト「カトリック教会のカテキズム」要約 Q&A（改訂版）……イバニエス・ラングロイス著・新田壮一郎訳　本体価格一、五〇〇円
●新しいカテキズムの内容を、問答形式でわかりやすくまとめた要理書です。要理教育にたずさわる人、カテキズムの内容を知りたい人にお勧めします。
お申し込み・お問い合わせは精道教育促進協会まで。

（昭和59年10月1日第三種郵便物認可）

持つものであって、愛であり、（造られたものではない）賜物です。この愛と賜物から、それを生きた源として、造られたものに与えられるあらゆる贈与（造られた賜物）が流れ出ます。すなわち創造を通じてあらゆる事物に授けられた実在という賜物、救いの計画を通して人間に与えられた恵みという賜物です。」（10番）

聖霊は神の神秘を啓示します。三位一体には神のペルソナが実在していますが、それは生命と救いを与えるため、人間に開かれているのです。聖パウロはコリント人への手紙でこのことに触れています。「霊は神の深みまですべてを見通すからである。」（Iコリント２・10）

（89年４月26日）

教皇さまの動き

●１・１　午前十時、教皇さまは神の御母マリアの大祝日・第31回世界平和の日のミサを聖ペトロ大聖堂で捧げられた。「本日の典礼にこだまする大いなる告知はこうです。人間は、神の独り子の誕生により、神の養子となった。これは御子の霊である聖霊のみわざであり、神は私たちの心に聖霊を送られたのであると。」「キリストがこの世に来られたことは、人間の救いという点から見ても重要です。生涯を通じて、特にその死と復活を通じて、キリストは明白に示されました。人間は死に定められた存在ではない。死ではなく、永遠の生命のために存在するのである。」 世界平和の日に関連して、「平和の探求が、全ての人に課せられた責任である正義への配慮をおろそかにしてはなりません。」

●１・３　午前十時半、昨年九月のイタリア中部地震の被災地を慰問するため、教皇さまはローマからヘリコプターで一時間のウンブリア州アンニフォに到着した。再建して間もない教会を訪問後、「この数ケ月、皆さんの苦しみを思い、祈り続けてきました。今こうしてここを訪れ、皆さんと全ての被災者の方々に心からのご挨拶を述べる機会が与えられました。」今回訪問できなかった地域の人々にも哀悼の念を表したあと、「失望しないでください。どんなに困難であっても皆さんの仕事や問題ごと、生活を主に委ねましょう。主は皆さんの苦しみをやわらげ、労苦の多い道を支え、付き添ってくださるはずです。」 次いで訪れたチェジの町で仮設の礼拝堂を前に、「万物の創造主は私たちの近くにおられ、私たちの苦しみと一つになっておられる。人間となって共に住み、全ての存在の源である愛で満たそうと願われたからです。」「混乱のさ中でも、信者は慰めの主の存在を見失うことはありません。皆さんも主の守りのもとに、物質的に町を建て直すだけでなく、まことの精神的な新しい共同体を築く力を得てください。」「一日も早く通常の生活が戻ることを望みます。」 昼過ぎ、ヘリコプターでアッシジに向かった教皇さまは、「聖フランシスコの墓の前で、地震の犠牲者とその家族、今も不自由な生活を送っている全ての人のため、主に祈ります。」「聖フランシスコと聖クララが、被災者を寛大に助けようとするイタリア全土の人々を祝し、支えてくださいますように。不自由な状態をも福音の精神で過ごすことができますように。」

●１・４　お告げの祈りの時、昨日の地震被災地訪問について触れ、イタリアの守護の聖人聖フランシスコに犠牲者と被災者のため取り次ぎを祈ったことを話されたあと、最近起こった誘拐事件について、「平和は全ての人の権利を尊重することから始まる」と述べた。さらにアルジェリアでの虐殺事件に関して「このような流血の犯罪に深い悲しみを覚えます。暴力は決してより良い未来をもたらすことはできません。」「平和の元后よ、恐ろしい内戦の犠牲となった人々とその家族をゆだねます。関係者たちがこの緊急のアピールを受け入れ、組織的暴力に終止符を打ち、人々の尊厳と権利を考慮した平和的解決を実現させるよう、祈ります。」

●１・６　聖ペトロ大聖堂で教皇さまは九名の司祭に司教叙階を行なわれた。「新たな福音宣教の忠実な担い手としてキリストの光を世界に広げてください。」

同日のお告げの祈りの前に、広場の群衆に向かって「今日、教会は主のご公現を祝い、星に従ってベツレヘムに来た東方の博士たちを思い起こします。」「東方の博士たちのエピソードで、神はキリストをあらゆる国と言語と文化の人々を救う方として世に示されました。キリストは死と復活を通してこの使命を果たし、ご自分がまことの正義と平和の王であることを証明されました。御父から受けたこの同じ使命が、教会に伝えられています。」「今年は聖霊に捧げられた特別な年です。聖霊こそ教会の使命の偉大な指導者であることを強調せずにはいられません。」

●１・８　ローマ市内の神学校の学生と教授たちを迎えて。「公現の祝日は、諸国民の光であるキリストの救いのみわざを広げるという教会の普遍的使命を思い出させます。皆さん一人ひとりがこの教会の使命のうちに場を占め、落ち度なく行き届いた奉仕ができるよう、準備をしているところです。そのためにまず必要なのは、聖霊への従順です。」「聖霊は教会の使命の推進者、新たな福音宣教の指導者です。聖霊は私たちをキリストに似た者とし、キリストにつき従い、キリストを証しする力を与えます。聖霊は日々の試練をも大

きな試練をも生き抜く聖性の源です。」

●1・9　ローマにあるルーマニア・カレッジの学生と教授たちを迎えて。「悲劇が次々に襲い、聖職者や信徒が獄につながれても、ルーマニアの教会はキリストに仕え、聖座との一致を保ちました。困難な時期の間、学校は東方諸教会の学生たちを受け入れてきました。」「皆さんの学生生活が、人間を神の秘義に近づかせ、神の真実を教える典礼に中心をおいたものでありますように。聖書と教父たちの著作を深く学び、真の神学の鍵とは何かを理解することができますように。」

●1・11　システィナ礼拝堂での主の洗礼の祝日のミサで、教皇さまは19名の幼児に洗礼をお授けになった。「本日の典礼は洗礼によって課せられた使命、すなわち信仰の火を絶やすことなく、ますます御父に愛される子となるよう努めるという決意を思い起こさせてくれます。」両親たちに、「キリスト教共同体と代父母の助けのもと、信仰のうちに子供たちを育て、一人前のキリスト信者となるよう指導してください。ナザレトの聖家族がこの大きな使命のために皆さんを助けてくれますよう。」「ヨルダン川で洗礼を受けたイエズスに降ったと同じ聖霊が今日この子供たち一人ひとりの上にとどまり、その光と力でイエズスに倣い生きるよう導いてくださいますように。」

同日、正午のお告げの祈りの時、午前中の幼児洗礼式に触れて、「ご一緒に、この子らと全ての新しい生命のため主に感謝しましょう。どの子供も神の「ご公現」であり、生命の贈物、希望、喜びです。洗礼を受けたあらゆる人のうちに、教会は刷新と生命と信仰という驚くべき賜物を認めます。絶えることなく生まれては栄える教会の子らの中に、全ての人に向けられた救いの秘義を感じます。」「生まれてくる世界中の子供たちのために祈ります。一人ひとりが愛情をもって迎えられますように。大人のキリスト信者のためにも祈ります。洗礼と堅信の価値に気づいた彼らが、受け継いだ信仰を深め、教会という霊的建築物の生きた石であることを実感することができますように。」

●1・14　一般謁見で、教皇さまは「キリストにおける時の神秘」についてお話しになった。「歴史上の偉大な時とは、御子が自分の生命を与えて、罪に沈んでいた人類に救いの声をお聞かせになった時です。それは贖いの時であり、イエズスの全生涯はこの時のためにあったのです。」「この劇的な時を決め、望まれたのは御父でした。神の定めた時が来るまで敵はイエズスを手中にすることができません。時が来たとき、それは敵が勝ち誇るかにも見えました。この闇の時、悪の力は誰にも止めようがないかに思えましたが、この時もやはり、御父の力のもとにあったことに変わりはありません。敵がイエズスを捕えることをお許しになったのは御父です。敵の行為は、神秘的ではありますが、神が定めた救いの計画の中に刻み込まれています。」最後に強調された。「至高の時とは、御子が御父のもとに行くその時です。御子のいけにえの意味が明らかとなり、そのいけにえが人間にとってどういう価値を持つかが余すところなく示されます。」

●1・15　ローマ市公会堂に到着した教皇さまは市長と教区総代理の枢機卿の出迎えを受けた。正午、教皇さまを迎えたローマ市議会臨時会合は、市長が挨拶に立って、ローマがイタリアの首都となって以来、パウロ6世の訪問に至るまで、会堂に教皇が足を踏み入れたことはなかったと述べた。教皇さまはそれに答えて、ローマの司教と市民との「有益な関係」について話された。「度重なる教区訪問と信者たちとの触れ合いを通して、両者の関係は敬意と好意に満ちたものになっています。」「ローマは大聖年のうちに反映され、大聖年はローマの本質を照らしだします。…ローマは使徒たちのかしらとその後継者たちの座であり、聖ペトロとパウロの殉教の思い出を保っています。ラテン法及びキリスト教の法と文明のふるさととして知られ、普遍的に開かれた町です。こうしたわけで、ローマは大聖年の恵みの模範となるよう召されています。」市議会へのお話の後、市民に向けてお話しになった。まず若者たちに、「少年少女の皆さんはローマの未来です。この町を愛し、その歴史と霊的な使命に誇りを持ってください。偉大な過去に匹敵する将来を築くために備えてください。」困難を背負う人々に、「心身に苦しみを抱く皆さん。この町を特徴づける昔からの連帯の精神が、皆さんを支えてくれますように。」続けて「異なった宗教と伝統を持つ市民の皆さん。アブラハムの信仰を受け継ぐユダヤ教徒の皆さん。キリスト教諸教会の皆さん。イスラム教を信奉する皆さん。…そして無宗教の人々と人生の意味を捜し求めている人々にも、ご挨拶します。」そして「最近他国から来て居住している皆さん、ローマの親しみ深さと平和の助けとなってください。」「兄弟姉妹の皆さん、また家族の方々。カトリック信仰に活気づけられた私たちの文明の不変の価値を忠実に守ってください。」

「教皇様の聲」　ヨハネ・パウロ二世教皇の説教、書簡、講話等を解説なしにそのまま伝える月刊紙
■毎月10日発行　■定価：送料とも一部186円　■年内定期購読：送料とも一部2,087円
詳しくは、精道教育促進協会までお問い合わせ下さい。

財団法人■精道教育促進協会　〒659-0093　兵庫県芦屋市船戸町12-6　TEL. 0797-31-3452・FAX. 0797-31-3448